

## 原三国時代前期終末における辰韓・弁韓の鉄器と度量衡

### Aspects from the Iron Implements and Metrology of Jinhan and Benhan Society in the Last Phase of the Early Proto Three Kingdoms Period

坂野和信\* 坂野千登勢\*\*

BANNO, Masanobu BANNO, Chitose

#### I. はじめに

辰韓・弁韓を含む嶺南地域では、原三国時代前期後葉に鉄器文化が本格化したことに伴う大型農具、多様な生産場面に対応する鉄器の登場等、農業・木工手工業生産部門等の変化が引き起こされ、鉄器と同様に織布交易も展開されたとみられる。このような状況は、生産分門での専門化の高まりと一体のものとして認識できる。

鉄器生産の多様化と織布等の主要交易品の流通<sup>1</sup>という、新たな経済的局面的展開を継承する社会変化の延長上に位置する前期終末は、一層複雑な様相が認められる。

本稿では、辰韓・弁韓の原三国時代前期終末における大型丸鑿と小型ドリル（螺旋状錐）の登場に象徴される鉄器の特化の様相と、前稿<sup>2</sup>でも一部触れた大型農具であるタビの登場と変遷、及び大河川流域における地域性並びに時期差について、鍛造系鉄器生産集団の差異として改めて整理する。

タビの成立と変遷過程から導き出されることは、主な河川流域における鍛造系集団の概念の違いであるといえる。原三国時代前期中葉から終末のタビの時期差は、約半世紀強であるが、この時期差を上回る各地域の鍛造系集団において、技術と概念の差異は著しく、かつ不均衡

であることが指摘できる。

また、原三国時代前期の度量衡についても、まとめる。

#### II. 原三国時代前期終末の社会変革

韓半島において、墳墓に鉄器類の副葬が開始される中国戦国時代後期前半(B.C.300)から楽浪郡成立以前の前漢併行期(B.C.110)は、鉄器と青銅器を併用する‘実質’初期鉄器時代であった。本稿では嶺南地域は原三国時代前期終末には、青銅器併用時代ではなく、本来の意味において青銅器文化が歴史的に止揚され、原三国時代中期へと繋がる鉄器文化の社会として、重要な社会的画期であったことを指摘する。

なお、原三国時代前期の時期区分は土器型式をもとに、前葉（BC110～70）、大楽浪郡成立との関係から中葉（BC70～50）、後葉（BC50～10）、原三国時代中期に繋がる終末（BC10～AD10）の併せて4期に区分する<sup>3</sup>。

#### 1. 前期終末墳墓と社会構成

弁韓校洞墳墓群・茶戸里墳墓群では、原三国時代前期終末から中期初頭との境界域に属する紀元前1世紀末～紀元後1世紀初頭の墳墓群(B.C.10～A.D.10)が比較的多く認められる。終末期としては、校洞8号墳・同1号墳・茶戸里23号墳・茶戸里32号墳の4基を挙げる（第1図）。また、原三国時代前期終末の度量衡を比

\* ばんの・まさのぶ

元埼玉大学教養学部非常勤講師

\*\* ばんの・ちとせ

埼玉大学教養学部非常勤講師

較検討するために、板状鉄斧のまとまった副葬がみられる辰韓林堂A・I地区-74号墳を併せて、5基について簡略に述べる。

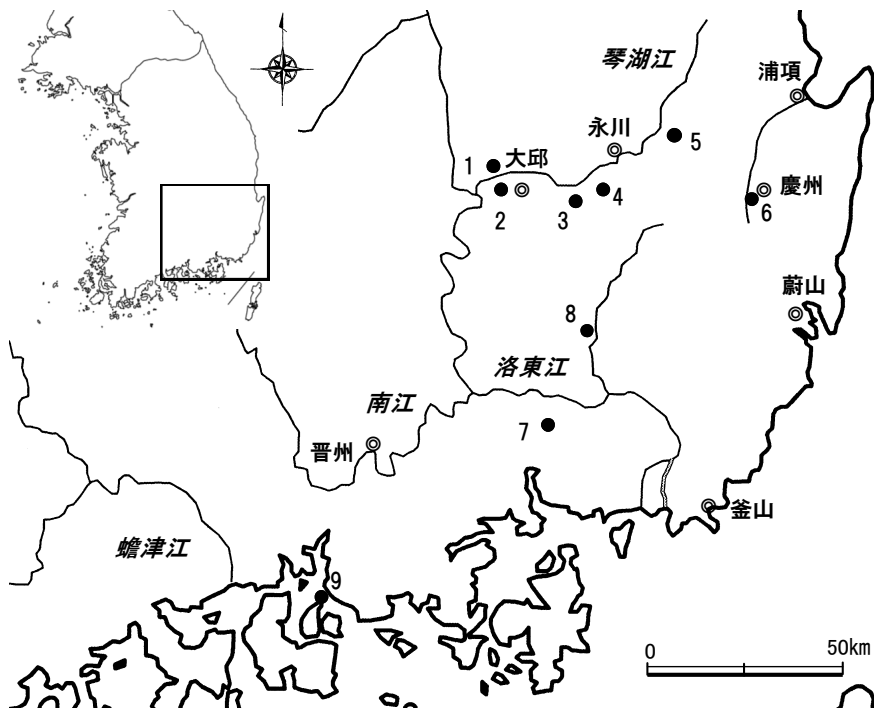
墳墓副葬品の変化によって、原三国時代前期終末の墳墓の大型鉄器と小型鉄器組成からみた被葬者の職能分化、及び大型鉄器の特化、特殊小型鉄器の登場、さらに一部大型鉄銚の度と衡について述べたい。

### (1) 大型鉄銚の度量衡

校洞8号墳<sup>4</sup>の鉄器副葬は、A-2 ランク(表1)である。大型鉄器は、鉄銚2点・鉄剣1点の武器類、及び木工具の丸鑿1点である。また、農具のタビ1点も伴い、大型鉄器による木工具と農具の組合せが特徴である。また、大型で刃部の丸い丸鑿は、嶺南地域において初期のものである。鑿の刃部先端は、初期鉄器時代以来、一般的に直線状の平鑿である。小型鉄器は、鍛造

鉄斧・鑿・鉋・鎌各1点である。これに成分分析は行われていないが、全長9.5cm、78gの小鉄塊(鉄滓か)を伴っている。また、土器類は牛角形把手壺C類と弁韓に特徴的な高坏B類、及び把手附長胴壺B類で、やや新しい傾向が認められる(第2図1)。

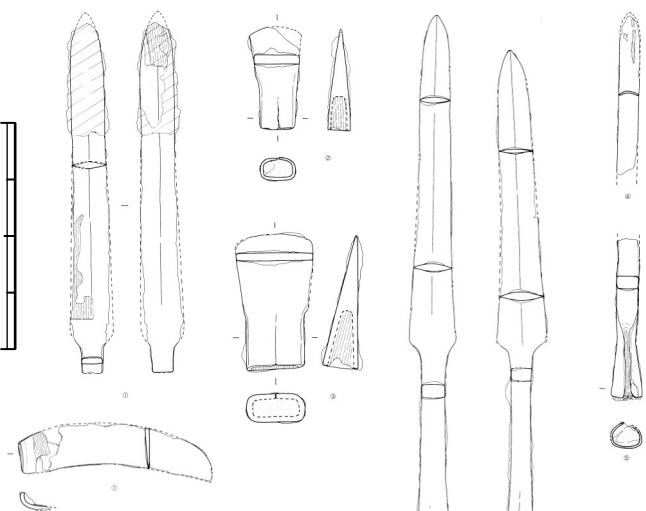
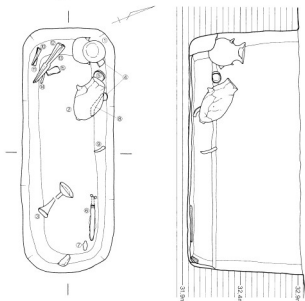
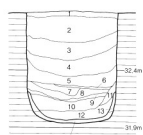
大型鉄銚は一般的に保存状態の良好なものが少なく、度量衡が検討できる資料はわずかである。校洞8号墳(第2図①・②)の鉄銚は、ほぼ完形で若干、釜部と刃部に損傷がみられる。全長55.3cm・2.3尺(1尺24.0cm)、412g・27.5両(1斤245g)。②全長51.7cm、刃部に歪みと損傷があるため、復原52.0cm・2.2尺(1尺23.6cm)、326g・21.5両(1斤242.6g)であるが、推定重量22両とすれば336gとなり、1斤244.4gに復原できる。①・②の大型鉄銚の度と衡は、校洞墳墓群の板状鉄斧の度と衡の中央値、度=1尺23.5~23.8cm・衡=1斤244.1~245.6gとは、



第1図 韓半島南東部 関連遺跡

- 1:大邱八達洞遺跡 2:月城遺跡 3:慶山林堂洞遺跡 4:造永洞遺跡 5:龍田里遺跡  
6:慶州朝陽洞遺跡 7:義昌茶戸里遺跡 8:密陽校洞遺跡 9:勒島遺跡

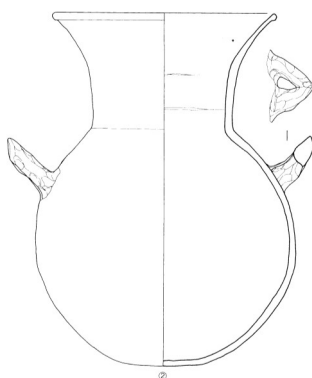
校洞8号墳 1



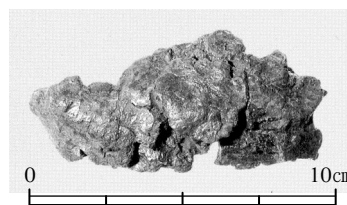
丸鑿



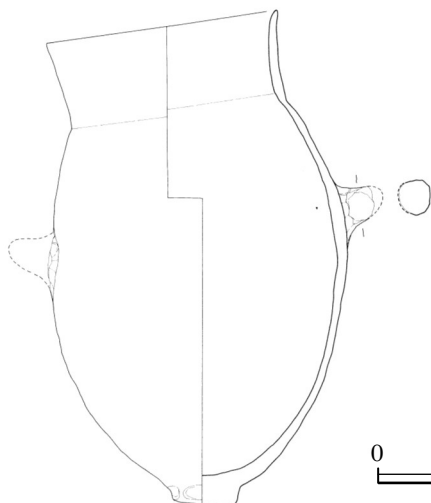
C類



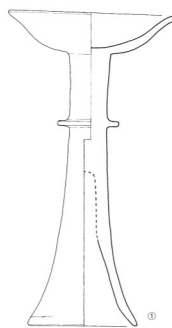
鉄塊



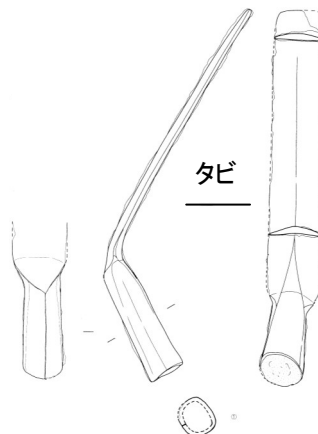
B類



B類



タビ



第2図 前期終末 墳墓と副葬品(1) 1:校洞8号墳

若干齟齬が認められる。

校洞 8 号墳の瓦質高坏 B 類は、器高約 28 cm の高い脚部の上位に円盤形の造り出しが施され、坏部は浅い。木製高坏を瓦質土器が模倣した器形で、灯火に適した器具である。茶戸里 3 号墳は器高約 34 cm、同 15 号墳にも類例が認められる。このタイプの高坏は、既に原三国時代前期前葉に存在する。牛角形把手壺 C 類は、原三国時代前期後葉から終末に辰韓・弁韓において登場する器種である。また、把手附長胴壺 B 類(第 2 図 1)は、萎縮した短い把手と長胴化した胴部で、校洞 9 号墳の後続型式とみられる新しい型式である。

## (2) 大型鉄器と小型鉄器の特化

校洞 8 号墳の大型丸鑿は、木棺等の大型木製品の製作に必要な工具だが、副葬事例は少なく、鉄器特化の典型といえる。現存長 25.2 cm、刃部先端幅 8.8 cm(残存長)、重量 470g(銚の小片錆が付着)、蓋部径 3.8~3.3 cm で木柄が残存している。また、タビは全長 33.5 cm、刃部長 26.0 cm を測り、最大級である。刃部断面中央に鑄が造られ、刃部基部幅 4.7、先端部 4.2 cm で細長く先端隅丸である。刃部先端の一部を損傷し、残存重量 404g・26.5 両(1 斤 244.0g)であるが、復原 415g・27 両(1 斤 245.9g)とみられる(第 2 図 1)。

校洞 8 号墳は、大型鉄器と農具の複合組成に加え、小型木工具が具備されるという特徴がある。この墳墓の被葬者は、農業と木工生産部門、小鉄塊(鉄滓)からみれば、鉄器生産の鍛冶と関連する三部門の生業を営む集団のリーダー格であった可能性がある。

次に、校洞 1 号墳(第 3 図 2)の鉄器副葬は、板状鉄斧 2 点と小型鍛造鉄斧・刀子各 1 点の A-3 ランクである。1 号墳の瓦質土器は、灰陶系短頸壺 A 類と巾着形壺 D 類で、D 類には胴部に屈曲が造られることが特徴である。先行す

る前期後葉の林堂 A-I 地区 148 号墳<sup>5)</sup>の巾着形壺 D 類は平底に造られ、地域差が大きい。校洞墳墓群での巾着形壺 D 類の成立は、新しい傾向を示し、次の原三国時代中期に継承される型式変化の兆しである。

校洞墳墓群で A-3 ランク墳墓は、嶺南地域最大の鍛造鉄斧、20 cm=8.5 寸、1300g・85 両と量器(5 升)を副葬した原三国時代前期後葉の校洞 18 号墳と併せて 2 基である。また、小型鉄器の副葬は簡素で、日常生活での使用範囲である。辰韓八達洞 28 号墳では、板状鉄斧 1 点(全長 17.2 cm・464g)、林堂 A-I 地区 91 号墳では、板状鉄斧 2 点(全長 28.0 cm・28.7 cm)が副葬される。板状鉄斧が単独副葬され、小型鉄器の副葬はみられないことが特徴である。

校洞 1 号墳の板状鉄斧 2 点は最長で、全長 31.7 cm (1.35 尺)・600g (39 両)、30.9 cm (1.3 尺)・646g (42 両)である。板状鉄斧は、通常 1 尺前後であるため、全長が 2~3 寸長いといえる。このように、校洞墳墓群 A-3 ランク被葬者の鍛造鉄斧と板状鉄斧には、特徴が認められる。

茶戸里 23 号墳<sup>6)</sup>は A-3 ランクの鉄器副葬で、板状鉄斧 2 点に加え、タビ 1 点の副葬がみられ、A-2 ランクの校洞 8 号墳と同様、大型鉄器による木工具と農具の複合組成が認められる(第 3 図 3)。上記した、校洞墳墓群の A-3 ランク墳墓(2 基)との差異は、木工具と農具の組合せに加えて、さらに、小型鍛造鉄斧・鑿・鉋・螺旋状錐(ドリル)という、多種多様な小型木工具の存在が確認できる点である。この螺旋状錐は、効率的に深く孔を穿つことができるため、加工作業効率を高めることができる画期的小型工具の登場といえよう。

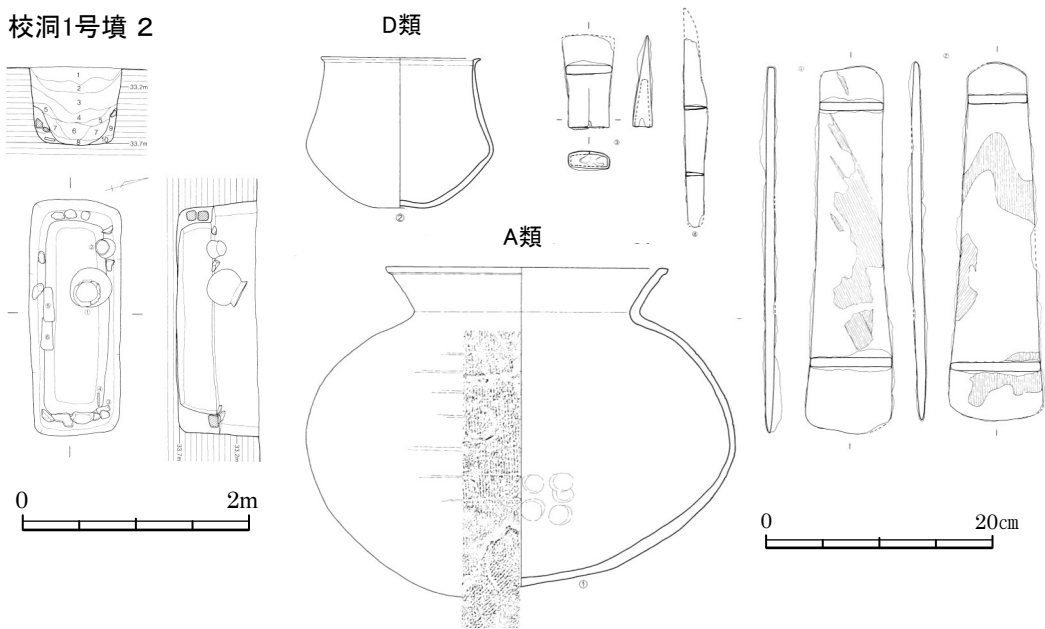
茶戸里 32 号墳では大型鉄器(第 4 図 4)としては、漆鞘鉄劍(鉄劍復原全長 43.5 cm)、小型鉄器は、鉄銚・鑄造鉄斧 Aa・Db 類<sup>7)</sup>、他に鍛造鉄斧・鑿・鉋・鎌各 1 点と鉄鏃 7 点である。また、漆製矢筒(復原)は、矢筒 81.0 cm (3.4 尺)・

表 1 鉄器副葬のランク

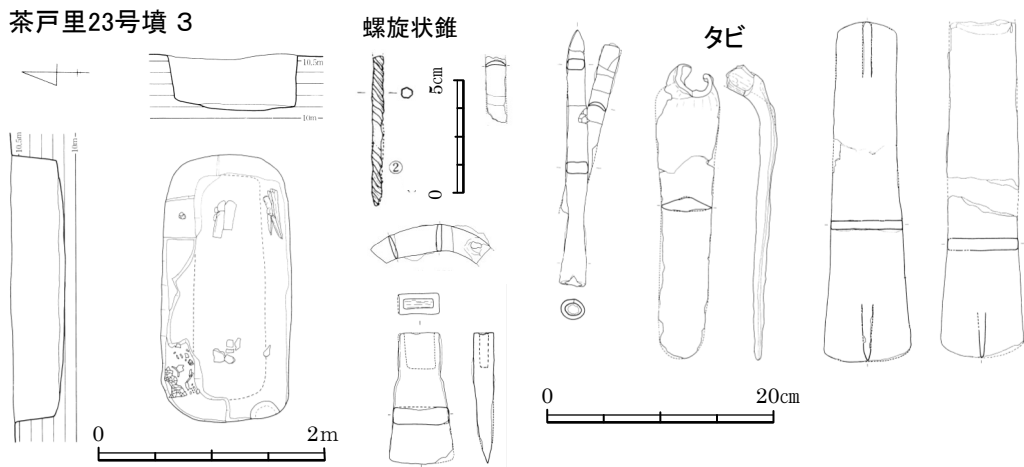
ランク		内訳	
A	大型鉄器2点以上、基本的には小型鉄器を伴う	A-1	大型鉄器10点以上
		A-2	大型鉄器10点未満3点以上
		A-3	大型鉄器2点以上
B	小型鉄器を中心とした副葬	B-1	大型鉄器1点と小型鉄器
		B-2	小型鉄器のみ

\*手工業分野の鉄器を中心とするため、農具と考えられるタビは大型鉄器としてカウントしない

校洞1号墳 2

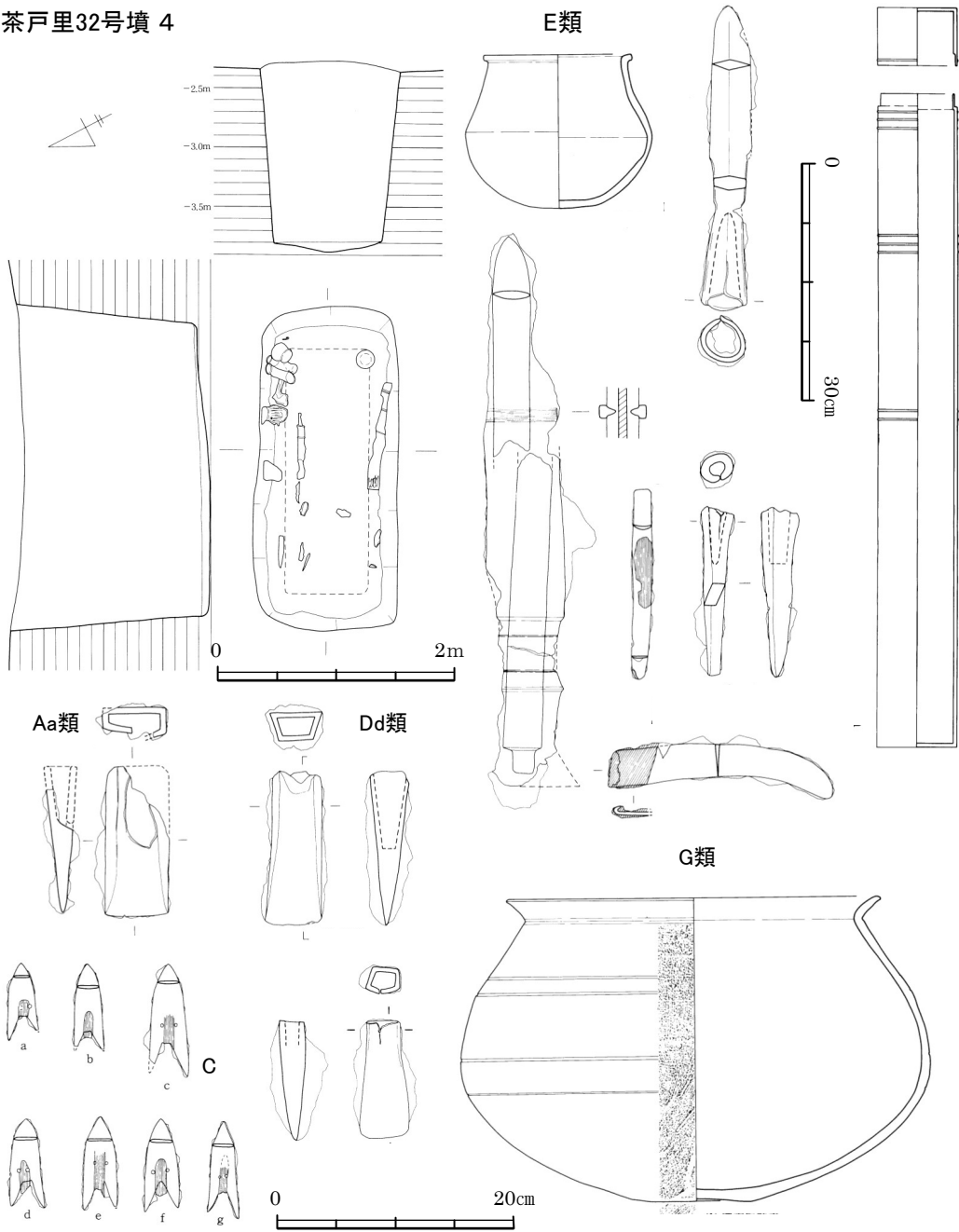


茶戸里23号墳 3



第3図 前期終末 墳墓と副葬品(2) 2 : 校洞1号墳 3 : 茶戸里23号墳

茶戸里32号墳 4



第4図 前期終末 墳墓と副葬品(3) 4：茶戸里32号墳

蓋 7.0 cm (3 寸)、全長 88.0 cm (3.7 尺・1 尺 23.8 cm) を測る。瓦質短頸壺 G 類・巾着形壺 E 類がある。短頸壺 G 類の先行型式は、原三国時代前期中葉の茶戸里 49 号墳に認められるが、類例は少ない。巾着形壺 E 類は C 類の派生種で、

胴部に張り出しが認められる。この土器型式が、原三国時代中期前葉の巾着形壺 E 類へと繋がる。したがって、茶戸里 32 号墳は、原三国時代前期終末と中期初頭を繋ぐ位置と考えられる。

辰韓林堂 A-I 地区 74 号墳は、板状鉄斧 16 点、鍛造鉄斧 4 点、鑿 2 点、銚・鉄劍・刀子・鎌各 1 点、及び青銅製品として、鏑・盤部・連結金具各 1 点・把頭飾金具 2 点、五銖銭 1 点を副葬する A-1 ランク墳墓である(第 5 図 5)。板状鉄斧を威信財、或いは蓄財として財力を示すために棺床面に敷き並べている。2 点の把頭飾金具から漆靑青銅飾鉄劍二振りの副葬も考えられる。板状鉄斧の法量は、全長 26.6~30.5 cm (1.10~1.25 尺) の範囲である。重量は計測されていないが、原三国時代前期終末の板状鉄斧の生産規格は、ほぼこの範囲と考えられる。板状鉄斧は 1 尺平均 23.96 cm であり、原三国時代前期中葉の 1 尺 23.58 cm と比較して、1 尺当たり 4 mm 長くなる傾向がある。

墳墓への青銅器の副葬が原三国時代前期後葉に激減したことは、既に指摘した。この意味で林堂 A-I 地区 74 号墳は、青銅器副葬を伴う A-1 ランク最後の墳墓の一つと考えられる。

以上、大型と小型鉄器特化について述べてきた。これらは既に、原三国時代前期後半の刃部二又板状鉄斧・超大型鍛造鉄斧の成立に始まっていた。原三国時代前期終末には多様な鉄器にも特化が認められることが大きな特徴で、大型丸鑿・大型タビ・長大化板状鉄斧、及び小型螺旋錐の登場にみる事ができた。嶺南地域において、鉄器の多様な特化と職能分化との関わりが問題となる。また、鉄器の特化は、木工生産分野での專業化の高まりと一体の社会的発展過程として、認識することができる。

## 2. 大型農具の変革と社会画期

原三国時代前期中葉に登場した大型農具(タビ)は、主要な生産活動である農耕作業に画期的変化を引き起こしたと考えられる。タビの成立は、林堂 A-I 地区 88 号墳の「熊の手鋏」が登場する以前に遡る鉄製農具の開発と同時に変革ともいえる。「熊の手鋏」の成立は、原三

国時代中期前半の紀元 1 世紀前半とみられる。ここではタビの特徴から、各地域の鍛造系鉄器生産集団との関係を検討する。また、嶺南地域におけるタビ成立期の特徴と、原三国時代前期中葉から終末の変遷過程について説明する。

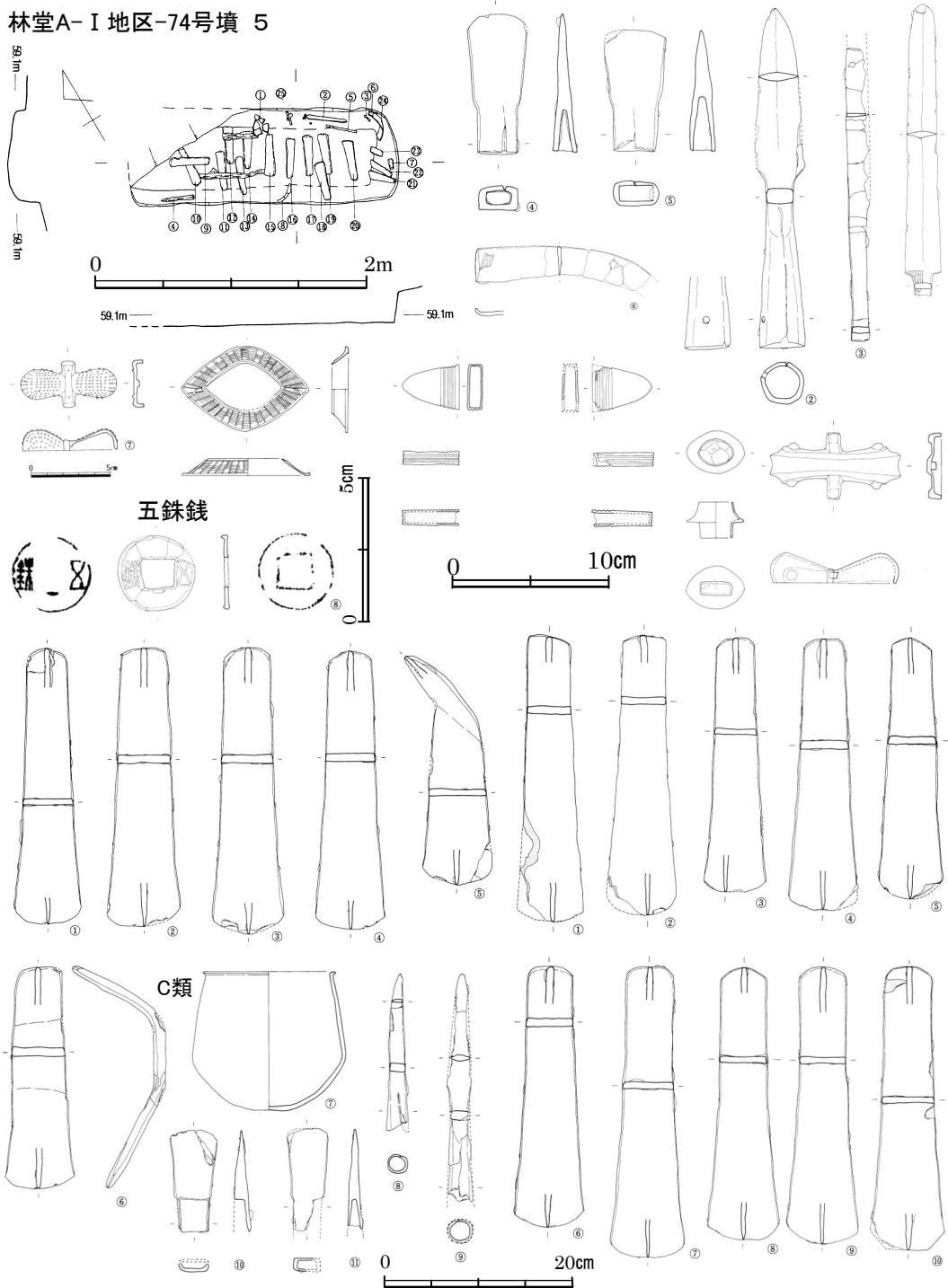
### (1) タビの成立と変遷

原三国時代前期中葉から終末の古式タビの特徴は、刃部の造り方にあり、琴湖江流域と洛東江下流域との地域差を超えて、共に刃部長軸が内側に湾曲する点に共通性が認められる(第 6 図 1・4)。前期後半のタビには、刃部縦断面が直線状と若干内湾する二つのタイプがみられる(第 6 図 5・6)。原三国時代前期終末のタビは、刃部長軸が直線状に造られることが特徴で、変化がみられる(第 6 図 7・9)。一方、刃部が最も長いものは僅かに内湾する(第 6 図 8)。その理由は、直線刃部と比較して湾曲刃部には弾力があり、衝撃に耐えられる機能的特性と考えられる。この意味で同じ形状であれば、直線刃部より湾曲刃部は衝撃に対する耐久性が高いといえる。

次に、刃部と長柄(釜部)との装着角度を計測するとタビの機能変化を辿ることができる。成立期の茶戸里 1 号墳(前期中葉)は、最も角度が広く鈍角で約 140 度(第 6 図 1)、小型タビはほぼ垂直であり、刃部が鈍角に造られる(第 6 図 3)。次に林堂 A-I 地区 148 号墳(後葉)は 132 度(第 6 図 4)、茶戸里 38 号墳では(後葉から終末)約 130 度(第 6 図 5)である。終末の校洞 8 号墳(第 6 図 8)は、全長 33.5 cm、刃部長 25.0・基部幅 4.7 cm、125 度、残存重量 404g (26.5 両)、復原 415g (27 両・1 斤 11 両)である。八達洞 101 号墳(終末)のタビは刃部が短くて広い。刃部長 18.7・基部幅 5.8 cm、135 度・303g (20 両・1 斤 4 両)で、再び装着角度が鈍角に近くなる(第 6 図 9)。

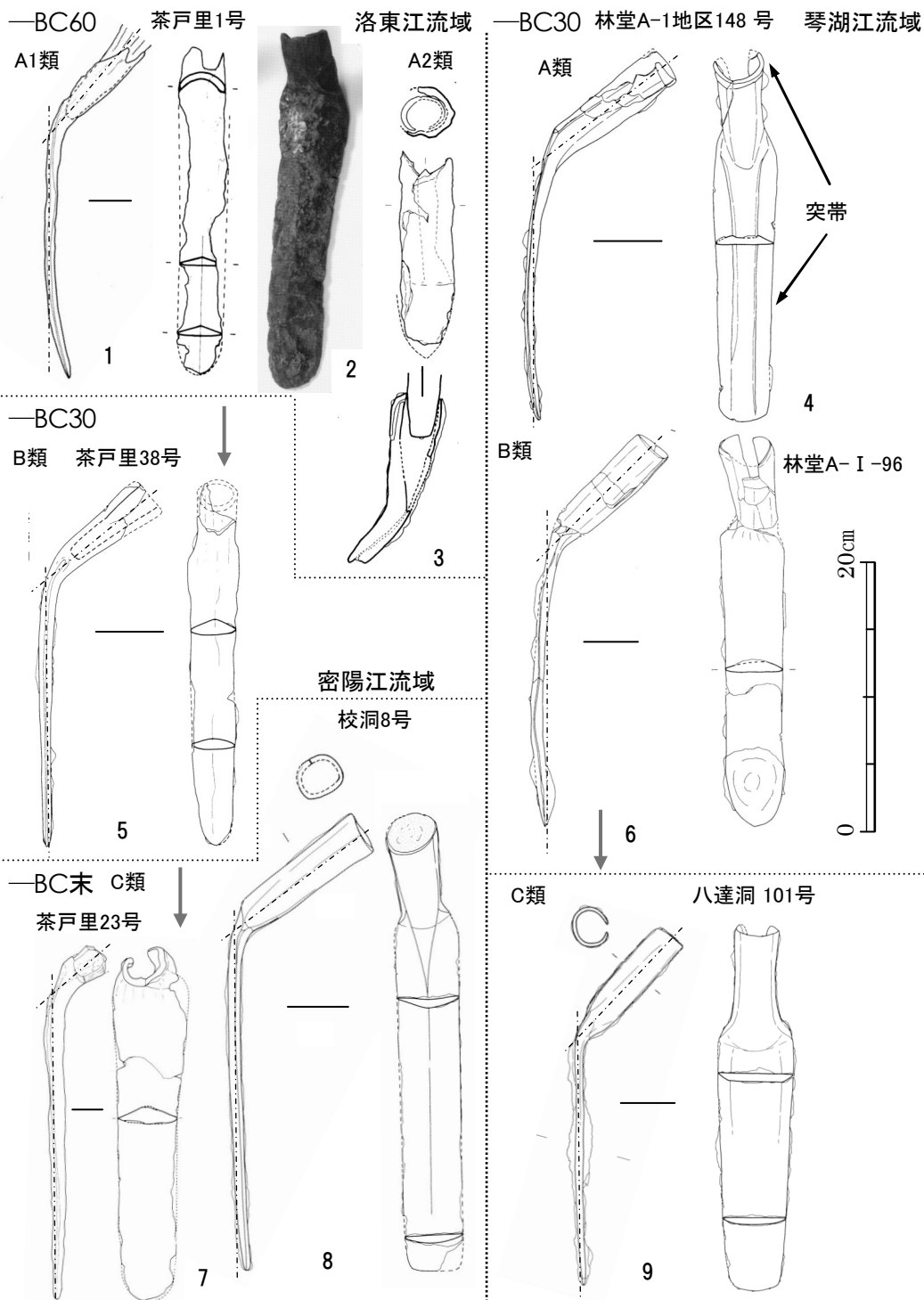
タビで重量計測が行われた資料は、上記した

林堂A-I地区-74号墳 5



第5図 前期終末 墳墓と副葬品(4) 5 : 林堂遺跡A-I地区-74号墳





第6図 原三国前期中葉～終末 洛東江流域・琴湖江流域 大型農具(夕匕)變遷過程

2点であり、他は推定である。校洞8号墳は最長で全長33.5cm、復原重量415gと最も重い例の一つである。また、八達洞101号墳は、全長26.6cmで、最も刃部は広いが短いためタビの重量は、小型品を除いて残存重量303g(推定310g)以下ではないと判断できる。即ち、タビの重量は、校洞墳墓群の大型板状鉄斧8点の平均重量640g(42両)以下であり、その重量の65~48%、約2/3~1/2の範囲内で、比較的軽いと推定できる。

タビの装着角度は、地面に突き刺す角度と相関関係があることは既に指摘<sup>9</sup>されている。上記した通り、鈍角から鋭角へと変化する傾向が認められる。タビは周知の通り、長柄を梃子の原理で刃部を引き寄せることにより、土を掘り起こす起耕具の役割をもつとされる。タビの機能は、校洞8号墳の大型タビ(第6図8)に最も顕在化したと考えられる。つまり、タビの機能は当初の起耕具から、土を引き上げる機能を兼ね備えた農具に変化したタイプ(第6図9)も併存したと考えられる。変化の契機は、八達洞101号墳のタビ(第6図9)にみられ、装着角度が再び鈍角になると共に、刃部が短く幅が広がることから、後の鋤の使用法に近づく転換期のタビの一例とみることができる。

## (2) 地域性と時期差

原三国時代前期のタビは、出土数も少なく揺籃期の資料であるが、鍛造系技術集団のタビを造ることに対する基本的な考え方の差異が存在しているといえる。

タビは、洛東江下流域と琴湖江流域の大きく二つの地域に分けることができる。①洛東江下流域のタビは比較的細身で、刃部断面三角形、或いは蒲鋒形で、中央に鑄を施すことが特徴である。②琴湖江流域では、茶戸里1号墳段階の資料はみられないが、刃部幅が広いことが特徴である。刃部断面低台形、または低三角形で鑄

は施されない。この琴湖江流域では刃部形状にも特徴がみられ、断面低台形のもの、刃部両側面に突帯か或いは稜線が施され、刃部を強化するための工夫(指向)が認められる。

このように、原三国時代前期中葉~終末における二つの流域のタビには、地域と技術の差を看取することができる。しかし、同じ流域であっても個体差が大きく、定型化したのではなく揺籃期の様相を呈している。おそらく大型タビは、高度な鍛造技術を駆使して造られる貴重品であったと考えられるため、その個体差に各地域の鍛造技術集団の個性と質的差異が反映された可能性が高い。林堂A-I地区148号墳(第6図4)と同96号墳(第6図6)を比較すれば、地域集団内部における鍛造技術自体に大きな差異の存在を指摘することができる。つまり、刃部断面低台形で両側面に突帯を施す(第6図4)と単純な蒲鋒形(第6図6)では、技術差と共に刃部構造から明瞭な違いが読み取れる。

このような技術格差の存在は、密陽江流域と洛東江下流域にも認められ、同時期で刃部に弾力をもつ刃部構造の校洞8号墳(第6図8)と、単純に断面が三角形に厚く造られる茶戸里23号墳(第6図7)には、製作時の考え方に差異があることが読み取れる。洛東江下流域の茶戸里墳墓群のタビの刃部構造は、初期段階から一貫して単純三角形であり、地域の鍛造技術集団の個性でもある。

揺籃期として図示したタビの時期差は、半世紀強である。しかし、その時期差を上回る鍛造系集団による技術と個性、及び概念の差異が著しく、かつ不均衡であるといえよう。

原三国時代前期終末は、タビだけではなく、先に指摘した通り、鉄器類は鑄造鉄斧・土器類は大型貯蔵器等にも辰韓と弁韓の地域差が認められる。つまり、手工業製品からも原三国時代前期後葉から終末は、辰韓と弁韓の地域差がより拡大して、嶺南地域を辰韓と弁韓に大きく

二つに分ける領域的枠組みが形成された重要な時期として、位置づけることができる。

### 3. 鉄器文化の本格的開花と変革

朝鮮半島の水田比率は、15世紀中頃の文献『世宗実録』「地理誌」の記録に、水田耕作の単位面積(一万平方尺)当たりの収穫量が記録されている。既に後藤直<sup>10</sup>が、『世宗実録』「地理誌」に基づいて、15世紀中頃の耕地結数を図化し、朝鮮半島の地域別に水田の割合を導き出している。

一般的に韓半島では降水量が少なく、雨季が7月後半～8月前半の半島南部の農耕地でも水田面積の比率は低い。1935年の農耕地に関する資料では、畠作と比較して水田の比重が低いことが指摘されている。慶尚北道は、水田と畠が50%で拮抗し、水田が慶尚南道では72%であることが示されている。当然、この資料を原三国時代前期に適用することには無理があると同時に、この水田と畠の比率以上に慶尚道地域で、畠より水田が多かったと考えることは、灌漑技術・稲の品種改良等の点から不可能である。ちなみに、山間部の忠清北道では水田の比率は45%であり、原三国時代前期の嶺南地域は、農耕地の半分以上が畠地であったと推定できる。

先述の原三国時代前期中葉に成立したタビは、畠作可耕地が多くを占め、一部の水田が農業生産基盤となる嶺南地域では、一層多くの役割を果たし、主として畠作農具として有効に機能したと考えられる。

一方、原三国時代前期では、他の大型鉄器と比較してタビが墳墓へ副葬されることは、意外なほど希である。その理由について、俄に説明することはできないが、茶戸里1号墳のタビ(第6図1・3)の蓋部・刃部が著しく破損していることをみると、消耗率が高い器具であることが、タビの希な副葬に繋がる一因

と考えられる。

重要なことは、原三国時代前期後半の嶺南地域において、タビの登場による農具の変革と前項で指摘した大型鉄器・小型鉄器の特化が引き起こされた点、及び既に指摘した鑄造・鍛造鉄斧等の鉄器生産規格の多様化である。これらの鉄器に関する象徴的出来事と、小型鉄器の副葬を主体とするBランク(表1)墳墓が台頭するという、社会基層の変化を指摘することができる。つまり、紀元前1世紀後半の嶺南地域は、鉄器文化が本格的に開花した鉄器文化社会であると位置づけることができよう。

原三国時代前期後半におけるBランク墳墓増加は、前期中葉を契機として辰韓の八達洞墳墓群にいち早く顕在化し、弁韓の茶戸里墳墓群にも波及する。また、前期中葉から造営が始まる校洞墳墓群、前期後半から造営が開始される林堂墳墓群では、AランクとBランク墳墓は相半ばして、前期後葉にはBランク墳墓の増加が認められる<sup>11</sup>。

原三国時代前期後半における鉄器文化の本格化と、その特徴についてまとめる。①大型・小型鉄器の如何を問わず鉄器の特化は、その生産量を重点に求める基本的需要とは異なり、鉄器の生産具としての質と適応力に関わる事柄である。つまり、鉄器の特化が認められるということは鉄器の社会的需要と一定の普及を前提とする進展した段階の鉄器文化社会として、位置づけることが可能である。②鉄器生産規格の多様化は、各生産部門での鉄器の利用場面の拡大と増加に伴う社会需要への対応の結果である。そして、③Bランク鉄器副葬墳墓の増加は、鉄器を所有する社会基層の拡大であり、社会的画期として把握することができる。

さらに、原三国時代前期後半における辰韓・弁韓の社会変化は、紡織・鉄器生産・木工生産分野等における手工業部門での職能分化と専

業化、及び社会基層の変化に照応する歴史的出来事として認識可能である。

朝鮮半島における‘実質’初期鉄器時代は、黄海沿岸地域を主体として、中国遼東・東北部系統・系譜をもつ鉄斧の墳墓への副葬によって開始される。その時期は、中国戦国時代後期(紀元前300~250年)であり、初期鉄器時代後期後半は、楽浪成立以前の前漢前期後半(紀元前150~110年)である。初期鉄器時代の実態は、青銅器を主体とする鉄器併用時代であった。しかし、嶺南地域では、原三国時代前期後葉頃(紀元前40~10年)には、本来の意味において、実質的に青銅器文化が歴史的に止揚されて、鉄器文化社会として重要な社会的画期が存在する。青銅器文化は、装飾品や一部威信財として社会需要に応じてはいるが、まさに、紀元前1世紀後半は、嶺南地域において鉄器文化が本格的に開花し、大きく辰韓と弁韓の二つの領域に決定的に分ける歴史的契機が形成された変革期と考えられる。

### Ⅲ. 原三国時代前期 辰韓と弁韓の度量衡

#### 1. 辰韓・弁韓の度と衡の基準値

辰韓・弁韓成立期に、中国前漢の度量衡制度の導入が行われ、青銅器・鉄器の金属器生産部門のみならず、木工生産・土器生産分野にもほぼ同一の基準尺が認められたことを指摘した。原三国時代前期において、度量衡制度の導入は、国際規格として生産・交易において重要な意味をもつと考えられる。

中国と韓国、及び日本で発掘調査された資料として、中国秦代から原三国時代前期の棹秤の錘である鉄権と銅権、及び天秤の分銅である砝碼(無紋銅環)について、また、前漢の度量衡制度との関係が深い、原三国時代前期で重量計測が行われた辰韓と弁韓の青銅器・鉄器の度と衡についても、改めて概略を説明する<sup>12</sup>。

古代中国の度量衡は、『史記・秦始皇本紀』

によって秦始皇帝が秦を統一した紀元前221年(皇帝26年)に度量衡の統一についての命令を詔書形式で発布したことに始まるとされている<sup>13</sup>。銅詔板を大型鉄権に打ち付けた山東省文登県筒山出土鉄権<sup>14</sup>、遼寧省敖漢城老虎山遺址<sup>15</sup>(第7図1①・②)等が出土している。総高18.5cm(8寸・1尺23.1cm)・底径25.0cm、重量30,750g(一石・12斤)であり、1斤256.25gとこの鉄権は、後述する秦の1斤平均重量253.80gよりやや重い(表2)。

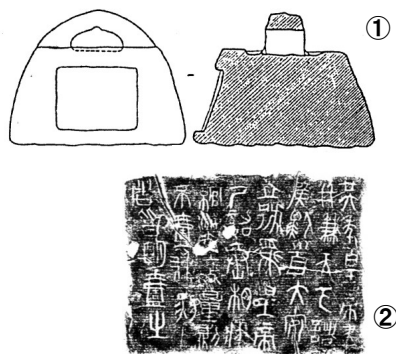
古代中国の長さの単位は十進法で、分・寸・尺・丈・引である。一方、衡(重量)は十進法ではなく、重さの単位は、銖・兩・斤・鈞・石で、24銖が1兩、16兩が1斤、30斤が1鈞、4鈞が1石である。前漢の1斤は平均値で246.65g、同1兩=15.42g<sup>16</sup>である(表2)。

戦国時代 楚の安徽省寿県朱家集から出土した木製天秤と6個の分銅<sup>17</sup>は、倍数で増加する関係で、1斤251.0gである。天秤の分銅は、6個の組合せ例が多くみられる。

韓国では、弁韓茶戸里1号墳出土の砝碼・分銅と考えられる無紋銅環<sup>18</sup>が4点出土している(第7図2)。また、倭との鉄交易と深く関係する泗川勸島のB地区ka-245号住居址からは棹秤の鉄権<sup>19</sup>が出土している。さらに韓半島南部とは一衣帯水の長崎県壱岐原の辻遺跡<sup>20</sup>からも、後漢の衡1斤244.18gに近似する弥生時代後期の鐘形銅権1点が出土している<sup>21</sup>(第7図4)。

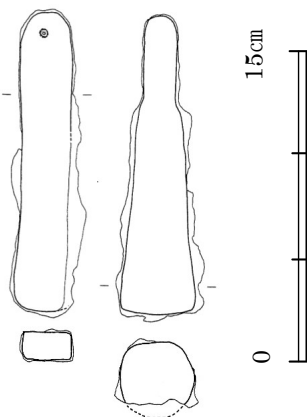
この他に度量衡に関係する資料として、時期が近似する典型的「韓国式銅劍」茶戸里1号墳(1号・2号)と、泗川勸島B地区ka-245号住居址出土の銅劍の尺度を比較したい。これらの大型で典型的「韓国式銅劍」は、漆鞘と組合う形式で所有者の威信財である。銅劍の大型化に伴う劍身部の造りには、構造的変化はなく、泗川勸島B地区ka-245号住居址出土の銅劍(第7図5-③)をみても、武器としても充分実用に耐え

老虎山遺址出土 鉄権 1



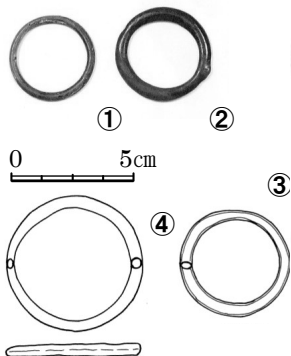
①総高：18.5cm、底径：25.0cm、重量：30,750g  
②詔書版「廿六年皇帝」 銘文拓本

勒島245号住居址出土 鉄権 3

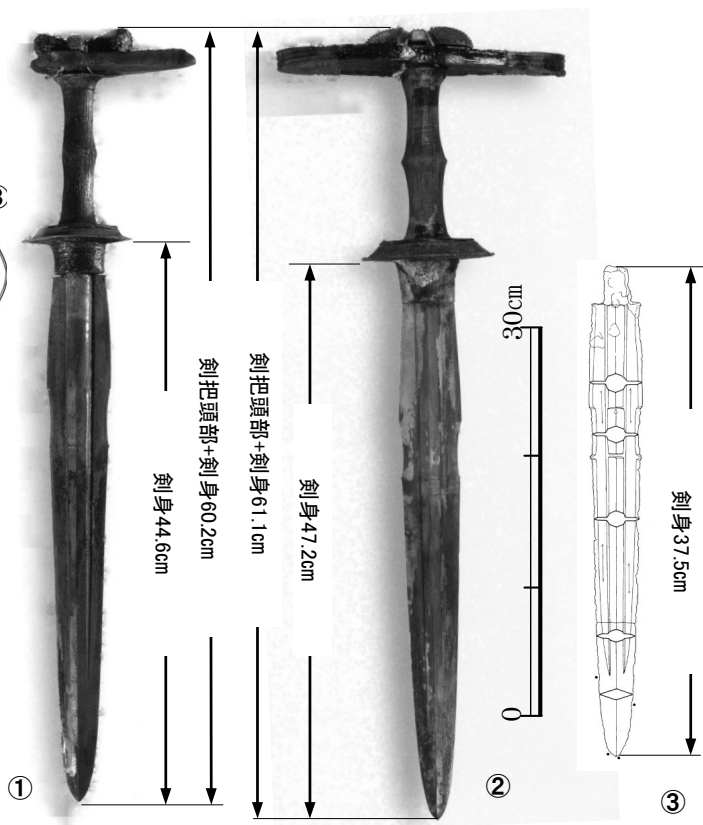
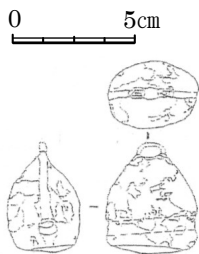


鉄権：全長14.5cm、残存重量：  
390.2g、推定重量：(490g)

茶戸里1号墳出土 砧碼(銅環) 2



①5.2g ②10.25g  
③11.55g ④22.73g



①②茶戸里1号墳 ③勒島カ-245号住居址

長崎県壱岐原の辻遺跡出土 銅権 4

前期中葉 青銅短劍 5

第7図 中・韓・日 度量衡関係資料 鉄権・砧碼・銅権・青銅短劍 1:註15B・2:註18・3:註19・  
4:註21・5:註18 文献を修正

る構造である。したがって、威信財として大型化した「韓国式銅剣」は、北部九州地域で弥生時代中期後半に造られた身部が極薄い、非実用的武器形青銅器とは、性格が異なることは明らかである。

茶戸里1号墳の1・2号細形銅剣の全長(剣身)は、44.6 cm(1.9 尺)・47.2 cm(2 尺)である(第7図5-①・②)。次に、勒島245号住居址出土細形銅剣の剣身は、37.5 cm(1.6 尺)である(第7図5-③)。茶戸里1号墳の1号銅剣の剣身は1.9尺(1尺23.47 cm)で、勒島245号住居址の銅剣の剣身1.6尺(1尺23.44 cm)とも近似することが判る。

## 2. 前漢の度・衡との比較

辰韓を中心に重量が計測された青銅器(武器)と鉄器(鉄斧)の度と衡の検討結果をまとめる。辰韓の原三国時代前期前葉では、①八達洞・造永・月城洞墳墓群、前期中葉では②龍田里墳墓、前期後葉・終末においては③林堂・朝陽洞墳墓群、参考として弁韓では④密陽校洞遺跡の検討

結果を提示する。

辰韓における前期前葉の青銅製武器の度は、1尺平均23.28 cm、衡は1斤平均247.40gである。この度と衡は表2に示す通り、中国前漢の度と衡に最も近似する。板状鉄斧は、前期前葉に鍛造鉄斧と共に成立すると考えられる。1尺平均23.70 cm、重量1斤平均246.2gである。鍛造鉄斧も1尺23.70 cmで板状鉄斧と同一尺度である。重量1斤246.0gと重量も板状鉄斧とほぼ同一である。このように、両者は鍛造系鉄器生産部門として共通する度と衡の基準によって、規格生産されていた可能性が高い(表2)。

鑄造鉄斧は、1尺平均23.26 cm、重量1斤平均246.50gである。この数値は同じ鑄造系の青銅製武器と近似する度と衡であり、鑄造系生産部門として度と衡の生産基準からも繋がりがあつたことが判る。即ち、原三国時代前期前葉の辰韓における鑄造系と鍛造系鉄器生産の重量は共通するが、基準尺の差異によって二つの金属部門として成立していたと考えられる。青銅器・鉄器重量基準の統一は、金属器の等価交

表2 中国前漢・後漢と原三国時代辰韓・弁韓の度量衡

時代・地域	度(尺cm)	量(升cc)	衡(斤g)	青銅器類 度(尺cm)・ 衡(斤g)	板状鉄斧 度(尺cm)・ 衡(斤g)	鉄斧類度(尺cm) ・衡(斤g)	
						鑄造	鍛造
秦	23.10	199.87	253.80				
前漢	23.25	199.13	246.65				
後漢	23.39	201.00	244.18				
辰韓 前期前葉				23.28 247.40	23.70 246.20	23.26 246.50	23.70 246.00
辰韓 前期中葉				23.40 ≒245.50	23.58 —	23.52 244.50	23.55 245.30
弁韓 前期中葉						23.50 —	
辰韓 前期後葉・終末					23.99 —	24.07 —	24.05 —
弁韓 前期後葉・終末					23.65 246.20	23.50 [246.0]	24.50 250.50

※ 中国の度量衡と同様に平均値、[ ]内は推定値

秦、前漢、後漢の数値は、『中国古代度量衡図集』による平均値

換と流通・交易に繋がる点で重要である。

次に、辰韓の前期中葉の龍田里墳墓の資料では板状鉄斧は1尺平均23.58cm、重量は総て計測されている。しかし、板状鉄斧には何れも損傷があり、検討の結果、重量1斤平均244.8g以上であることは指摘できるが、1斤当たりの平均重量は未確定である。鍛造鉄斧は1尺平均23.55cm、重量1斤平均245.3gである。板状鉄斧の重量も1斤平均244.8g以上であり、鍛造系鉄斧は1斤245~246gの範囲内と考えられる。鍛造系生産集団の平均基準尺は、1尺23.57cmである。

したがって、原三国時代前期前葉と同様に中葉においても、鍛造系鉄器生産部門として板状鉄斧と鍛造鉄斧は、共通する規格によって生産されていたと考えられる。

原三国時代前期中葉の鍛造系鉄斧・鉄銚の尺度の23.57cmは、前期前葉の鍛造系鉄斧1尺の基準尺23.70cmと比較すると、1尺当たり1.3mm短く、重量は1斤当たり約0.7g軽くなる。辰韓の前期中葉の鑄造鉄斧は1尺平均23.52cm、重量1斤平均244.5gである。前期前葉と比較し、尺度は1尺当たり2.6mm長く、重量は1斤当たり2g軽くなる。

また、後葉から終末では、中葉に比べると鑄造鉄斧、鍛造鉄斧とも1尺が長くなる傾向が認められるといえる。

## まとめ

鉄を基本的資源とする原三国時代前期の韓半島南部辰韓・弁韓両地域を含む嶺南地域において、墳墓へ副葬された鉄器の比較検討から、度量衡が導入されたことを指摘し、これが画期となり、社会構造が変化していく過程を考察した<sup>22</sup>。

鑄造鉄斧や鍛造鉄斧、板状鉄斧などの鉄製品をはじめとする手工業製品の生産に中国前漢の法量と重量規格である度と衡という統一さ

れた規格である度量衡が導入され、その製品の交易を通して、楽浪郡をはじめ、倭などの周辺社会と交流し、関係性が変化していく様相を述べた。

原三国時代前期の辰韓・弁韓では、生産の技術革新・交易ネットワークの形成において、国際規格としての度量衡の採用は、漢字受容と共に、経済的側面だけではなく、人の交流、及び多様な技術・情報の交流を促し、その後の東アジアにおける基盤の形成という点からも、大きな意義があったといえる。

また、原三国前期前半の墳墓には、鑄造鉄斧を意図的に破砕し、鉄斧の機能自体を壊失させて仮器化する葬送儀礼と、埋納する祭祀が行われたことも指摘した。

原三国時代前期中葉以降は、副葬品から拮抗する辰韓・弁韓両地域勢力の間で交易の中心地が移動したこと、板状鉄斧も実用品から、蓄財及び富の象徴へと変化したと考えられる。

辰韓・弁韓では大型鉄器の特化と鑄造鉄斧の多様化、及び地域差が現れ、弁韓にも独自の鑄造鉄斧が成立し、前期後葉には副葬された鉄器組成から、被葬者の職能分化との関係が推測できた。

嶺南地域では、紀元前1世紀後半原三国時代前期後葉頃は、本来の意味において、実質的に青銅器文化が歴史的に止揚され、鉄器文化が本格的に開花した。タビの登場など農具の変革や小型鉄器の副葬を主体とする墳墓が増加し、社会基層の変容が認められた。この時期は、嶺南地域を大きく辰韓と弁韓の二つの領域に決定的に分ける、その後の三国時代へ繋がる歴史的契機が形成された変革期として位置づけられるといえよう。

**謝辞** 東国大学校 安在皓教授と東亜細亜文化財研究院 辛勇旻理事長、及び同研究院 裴徳煥院長 崔景圭団長、また、日本国内では、埼玉

大学 中村大介准教授からは、助言を頂いたことを記して、御礼申し上げます。

なお、本稿は未完となった故 坂野和信「原三国時代前期の度量衡の成立」(2012.1.31 校了)の一部について坂野千登勢が検討し、再構成したものである。

## 註

- 1 坂野和信 他 2016,「紡錘車からみた原三国時代前期辰韓・弁韓社会」,『埼玉大学紀要 教養学部』第52巻 第1号
- 2 前掲註1に同じ
- 3 前葉の初めについては初期として、また、前期を大きく二分して前半と中葉以降を含む後半に呼称する場合がある。
- 4 郭鐘喆 他 2004,『密陽校洞遺跡』,学術調査報告 第7冊,密陽大学校博物館
- 5 韓国文化財保護財団 1998,『慶山 林堂遺跡(I)-A~B地区 古墳群』,学術調査報告 第5冊
- 6 李健茂 他 1995,「義昌 茶戸里遺跡発掘進展報告(IV)」,『考古学誌』第7輯,国立中央博物館
- 7 前掲註1 文献 p203 凡例参照
- 8 前掲註5と同じ
- 9 李東冠 他 2008,「弥生・古墳時代の日韓鉄製農具研究」,『日・韓交流の考古学』,第8回 合同考古学大会,嶺南考古学会・九州考古学会
- 10 後藤直 2006,『朝鮮半島初期農耕社会の研究』, p305-308, 同成社。1935年の統計資料による全耕地面積に占める水田面積について、地域ごとの比率が示されている。
- 11 前掲註1 表4・5参照
- 12 坂野和信 他 2015,「原三国時代前期の鉄器と度量衡」,『埼玉大学紀要 教養学部』第51巻第1号
- 13 丘光明 2000,「中国古代度量衡」p77~p96,『計量史研究』22,日本計量史学会
- 14 蔣英炬・呉文棋 1974,「山東文登発見秦代鉄剣」,『文物』7期
- 15A 敖漢旗文化館 1976,「敖漢旗 老虎山遺址出土秦鉄権和戦国鉄器」『考古』5期  
B 邵国田 2004 主編,『敖漢文物精華』内蒙古文化出版社
- 16 邱隆・丘光明他編 1981,『中国古代度量衡図輯』,中国国家统计局、文物出版社
- 17 于省吾 1957, 96 葉,538 器『商周金文録遺』,科学出版社
- 18 李健茂 2008,「茶戸里遺跡発掘の意義」,『葦原の中の国 茶戸里』国立中央博物館
- 19 李昌熙 2007,「靑島住居址出土の祭祀長-B地区 カ-245号住居址 出土遺物検討一」『第17回考古学 国際交流研究会 韓国の最新発掘調査報告会資料』大阪文化財センター。また、詳細な写真と図解も頂いた。
- 20 銅権は平成14年(2002)1月22日,長崎県原の辻遺

跡調査事務所発表。

- 21 江浦洋他 2007,『計る・測る・計る一度量の歴史展一』図録36,大阪府立弥生文化博物館
- 22A 坂野和信 他 2015,「初期辰韓社会における鉄器受容と度量衡」,『埼玉大学紀要 教養学部』第50巻 第2号  
B註12文献に同じ  
C 坂野和信 他 2016,「原三国時代前期の辰韓の鉄器と対外交渉」,『埼玉大学紀要 教養学部』第51巻第2号  
D註1文献に同じ

## 参考文献

- 藤田亮作他 1925,「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」,『大正十一年度古蹟調査報告第二冊』,朝鮮古文化 綜鑑 第1巻,養徳社
- 延鶴編 1972,『韓国の考古学』,河出書房新社
- 朝鮮民主主義共和国 社会科学院考古学研究所 田野工作队 1978, p25『考古学資料輯』第5輯,科学百科事典出版社
- 尹容鎮 1981,「韓国青銅器文化研究-大邱坪里洞出土一括遺物検討」,『韓国考古学報10・11』,韓国考研究会村上恭通 1999,『倭人と鉄の考古学』,青木書店
- 高久健二 1999,「楽浪古墳出土の銅鏡」,『考古歴史学志』,第十五輯,東亜大学校博物館
- 『日本考古学事典』2003,「度量衡」,三省堂
- 李陽珠 他 2007,『永川 龍田里遺跡』学術調査報告 第19冊,国立慶州博物館。
- 坂野和信 2007,『古墳時代の土器と社会構造』,雄山閣
- 武末純一, 2009「茶戸里遺跡と日本」,『茶戸里遺跡 発掘成果と課題』昌原茶戸里遺跡発掘20周年国際学術交流会議,国立中央博物館
- 後藤直 2009,「弥生時代の倭・韓交渉」,『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集,国立歴史民俗博物館